東亞における漢文化の位置

凡そ支那を中心とする東亞地方においては、支那に據つた漢民族の文化が古來著しき發達を遂げ、他の諸民族は到底この點において對立し得るものでなかつたことはいふまでもない。されば漢民族がその文化圈外に屬する四方の民族を稱するに戎狄蠻夷の名を以てしたのが、遂には文化發達の程度の低い四隣民族を輕侮して呼ぶ貶稱となり、これ等の諸民族もまた到底文化の上においては漢民族に對立し得ざるものと考へ、支那の文化を崇拜し、偏にこれを模倣して一歩でもそれに近づき得たことを以て誇としたのが通例である。

山西から河南へと乘出した鮮卑種族の魏が著しくその文化を高めたといふのは、彼等の間に殘されてゐた固有の文化を全く遺棄して、漢文化に同化し切つた謂である。契丹の太祖阿保機がやうやく勢力を得て、漢文の詔勅を發せしめた時、文章の拙い爲に笑を招くことを恐れ、特に能文の士を搜求してこれを草せしめたのも、當時既に契丹が文化の程度の低い夷狄でなく、かくまで漢文化に通じてゐることを誇示しようとしたものに外ならぬ。かゝる態度は一々例證を擧げないまでも、史乘に頻出する事例によつて明らかに觀取し得られることであつて、優劣高下の差あるものの對立する場合において、極めて當然のことといはねばならぬ。

契丹や女眞民族がその勢力の發展と共に愈々民族意識を高め、遂に各强大な國家を形成し、自から文化の向上發達に努めたことは前にも述べたところであるが、さてその文化は如何なる性質のものであつたかといへば、契丹・女眞の文化とはいひながら、所詮漢文化を採入れて、これに多少とも自己の工夫を加へたのに外ならず、もとより